Osaka University Knowledge Archive

Title	永井荷風『ひかげの花』論 : 〈小説〉と〈手紙〉を中心に
Author(s)	アブラル, バスィル
Citation	語文. 2017, 109, p. 27-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73307
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

語文109（2017・12　大阪大学国語国文学会）

永井荷風『ひかげの花』論

――〈小説〉と〈手紙〉を中心に――

アブラル・バスィル

一、はじめに

『ひかげの花』は一九三四年九月号の「中央公論」に発表された。本作では主人公中島重吉の凡そ二十年にわたる人生が中心に語られる。重吉は現在私娼であるお千代と同棲し、日々の生活を送るために彼女に頼っている。むかし金持ちの女性の男妾同様な生活をしてきた重吉は、現在の境遇においてむしろ自らの性的快楽を追求しているばかりである。一方のお千代も、「夫のために」という口実を掴んで卑猥な人生を送る。『ひかげの花』の末尾では、長年行方不明であったお千代の私生児おたみと、彼女が子供の時世話を見てやった塚山という人物が登場する。現在私娼となっているおたみは、ある偶然から母とその愛人である重吉に巡りあった経緯を塚山宛の手紙に記す。『ひかげの花』はこの手紙の引用で閉じられる。

『ひかげの花』初出のテクストには、雑誌編集部の自主的な措置によるおびただしい量の伏字や削除が認められ、[1]初刊も戦後まで延期されてしまう。にもかかわらず、『ひかげの花』は様々な議論の的となり、特に正宗白鳥と菊池寛との間で為された意見の応酬は文壇内の注目を集めた。菊池は私娼と「ヒモ」とを題材とする作品の内容や作者の倫理性を問題視したのであるが、[2]正宗はこれに反論しながら「作者の巧みな観察と描写」[3]を称賛して見せる。倫理性の問題のほか、本作における〈描写の客観性〉もまた評価の争点となった。川端康成は『ひかげの花』について「客観の冷たさが実はなまぬるくよごれ」[4]ていると酷評しているが、これに対してまさに本作における「冷静かつ傍観的な描写」[5]を推奨する加能作次郎の評言が見られる。

この二つの問題点は後年の研究においても継承されていく。『ひかげの花』の倫理性に関わる議論は、主として本作に一種の社会批評性を見出す論に反映されていると考えられる。この種の議論においては、『ひかげの花』に描かれている世界の汚らしさ

や不道徳的な要素が認められる一方、その登場人物―とりわけ重吉と塚山―の言動が荷風の思想と結ばれ、作品に潜在している批評性が評価されるのである。吉田精一[6]は重吉について「文学本来の反逆精神」を指摘する。小林一郎[7]は、重吉の言動が「「立身出世」という明治の世相を痛烈に批判し」たものであると主張するだけではなく、塚山にも荷風の影を認め、塚山の思想について「芸者、娼婦、私娼、女給と言った様な女に対する荷風の考え」であると主張する。笹淵友一[8]も本作の登場人物の言動と荷風の思想とを関連付け、特に塚山について「荷風の人生観を代表している」と述べている。ただし笹淵は、種子の淫らな男関係を知りながら一年間も沈黙し続ける重吉の人物造形に「荷風の計算違い」があると述べたうえで、重吉の社会批評めいた言葉について「負惜しみの弁解じみて実感に乏しい」とも指摘する。

このほか川端たちが注目した『ひかげの花』の描写の手つきが客観的か否かは、現在においてもはや問題とはならず、むしろ語り手の主観的な描写方法の意義を論じることさえある。坂垣公一[9]によると本作では、「「屈辱」によって女性の「ひも」になり、その苦痛を忍ぶ「経験」から屈辱に快感を覚える」という「筋の展開が重視」されているので、重吉の内面の変化の描写は粗雑になっている。また、嶋田直哉によれば[10]、重吉は「「堕落」した自身の境遇を納得させる的確な論理構成に裏付けられた「小説」」を獲得しているが、お千代は「「深みへと堕ちて行つた」という自己認識」さえ持ち得ない。このような語り手の態度の背景について、嶋田は一九三〇年代の私娼の言説の導入を指摘し、『ひかげの花』はおたみの手紙にその言説を対象化もしていると、作品の語りの構成を分析している。

概観してきたように、『ひかげの花』の研究において、特に小説の社会的批評性を読み取るために、しばしば作者自身の思想が小説の外部から持ち込まれる傾向が見られる。しかし登場人物の言葉として発せられている内容を荷風本人の思想と関連づける前に、その場面の具体的な状況を精査する必要がある。本稿は可能な限り『ひかげの花』のテクストそれ自体に対峙し、そのなかで浮上する問題点について考察するかたちで作品の読解を進めてゆく。とりわけ重吉の〈小説〉とおたみの〈手紙〉を重視したい。重吉の過去が語られている第三章において、語り手は重吉の〈小説〉に描かれている内容を要約して語っていると考えられる。つまりそこに示されているのは当時の出来事それ自体ではなく、それらの出来事がもとになって描かれている重吉の〈小説〉である。だとすれば、出来事の順序立てや因果関係、あるいはそこに描かれている重吉の内面の変化に関する記述等から、〈小説〉の著者である重吉の主観を読み取ることは可能であろう。これにより、従来荷風のミスとされてきた重吉の人物造形を見直すとともに、〈小説〉の論理構成とその執筆の背景も明らかになってくるはずである。おたみの〈手紙〉もこれと同様に、あくまでおたみの主観による言葉である。このことに鑑みれば、その内容を素朴に受け取るのではなく、〈手紙〉が書かれた背景、すなわちおたみと

塚山の関係も考慮する必要が生ずる。二人の関係の分析はおたみだけではなく、塚山という人物の位置づけにもつながれば、〈手紙〉で描かれるお千代についての言葉を理解するためにも欠かせないものである。確かにお千代は本作が発表された時期の私娼のイメージに似通う性質を持ち合わせている。しかしそう考えるとおたみがわざわざ自身も含め、「低能」な私娼像を塚山に伝える意義はどこにあるか、疑問が残る。本稿において、むしろおたみは私娼全般ではなく、お千代だけの「低能」さを前景化しているのではないかという新たな視点を展開させる。

〈小説〉と〈手紙〉は『ひかげの花』が内包する様々な問題と直結しているのであり、それぞれの分析は本作の主題を理解するために必要不可欠な作業である。以下、重吉が書いた〈小説〉から考察を始める。

二、〈小説〉の射程—生活手段と快楽の一致

二・一 〈小説〉化された過去の矛盾

先述したように、『ひかげの花』において重吉の過去の大半が彼の書いた〈小説〉のまとめとして語られている。重吉本人も今現在の自分の姿を見つめる時に必ずその過去を意識しているから、彼の自己認識を読み取るために〈小説〉は欠かせない材料である。そもそもこの〈小説〉はなぜ書かれたのか。この問いに答えるために、重吉の自叙伝では何が書かれているのかを見極める必要がある。

〈小説〉では重吉が大学を卒業する前後四、五年間の出来事が述べられている。重吉が種子と一緒に住むようになった後、国元からの仕送りが断たれ、卒業するまでの間、経済的に種子に依存することになる。卒業して間もなく就職口を見つける重吉だが、わずか一年ほどで解雇され、再び経済的に種子に支えてもらうことになってしまう。ただし仕事に就いていた一年間で、彼と種子との関係性には大きな変化が生ずる。それは、相手の行動を怪しがる重吉が探偵社に依頼して、調査させた結果、種子の妾としての前歴、更に彼女が現在自分以外に数人の男と関係を持っている事情についても知ることになったのである。種子の秘密を知ってから、そのまま一年が経過するが、今度は種子本人が自身の秘密を重吉に打ち明ける。種子の告白を聞いた後の重吉の内心は以下のように描写されている。

> 重吉は種子の語つたことを冷静に考へてみた時、始めて自分は淫蕩な妾上がりの女に金で買はれてゐる男妾も同様なものである事に心づいた。

つまり、〈小説〉の主人公である〈重吉〉は、種子に身の上のことを告白されて、はじめて自分が「男妾」のような存在であることに気付いたとされている。その後、憤怒した彼は一旦種子との縁を切ろうとするものの、「自活の道を求める事のいかに困難であるかを知」らされ、仕方なく種子との同棲を続けていくことにする。ただし重吉は種子に告白される時点より一年以上も前から、種子の多情であることを知りつくしているはずであるし、そ

の当時ではまだ失職していないので、「自活の道」は整っている状態にあったと言える。要するに〈自分は男妾のようだ〉という自己認識は、この時点よりはるか前に形成されるべきものであるのに、一年間の空白を置き、種子の告白を聞いてから、はじめて「廉恥の心」に悩まされるようになったとされているのである。

このような〈重吉〉の人物造形には、確かに一種の矛盾が認められる。[12] しかし先に述べたように、この箇所において語り手は、過去に起こった客観的な事実を述べているのではなく、重吉の〈小説〉を要約しているに過ぎないので、内容のちぐはぐさから、重吉の内的葛藤に迫る新たな手口を掴むことができる。自分が種子に金で買われているも同然だと知りながら、一年間も同棲し続ける点に鑑みれば、重吉は自らのヒモとしての姿に煩悶を覚えるほど敏感な羞恥心を具える人物であるとは言い切れない。しかし、その姿を種子に指摘された際に感じた「侮辱」は、これとは性質を異にしている感情であると思われる。重吉の煩悶の源に「かつて覚えたことのない侮辱」と、それがもたらした「廉恥の心」という、他人の存在によって喚起された感情があると考えられる。

要するに、重吉に「己の行為に対する辯疏」となる〈小説〉を書かせたのは、自らのヒモとしての自己認識等ではなく、その姿を相手の女に指摘されて受けた「侮辱」であると考えられる。重吉は〈小説〉の中で、生活難を避けるために侮辱に堪えなければならない、という合理的な道程を作り出し、更にその背景に「学生上がりで悪気がない」が「妾上がりの女」に弄ばれている、という自己像も作り上げる。このように〈小説〉に施した工夫によって善良な自己像が守られ、自らの選択した道も正当化される。その過程で、廉恥の念に悩まされる〈重吉〉は、「良心を麻痺させ廉恥の心を押さえるやうな方法」を掴むために、反俗的な姿勢をとり、次のような理屈まで述べている。

> 世間には立身栄達の道を求めるために富豪の養子になつたり、権家の婿になつたりするものがいくらもある。現在世に重んぜられてゐる知名の人たちの中にもこの例は珍しくない。それに比較すれば重吉はさほどその身を恥じるにも当たるまい。女の厄介になつて、のらくらしてゐる位の事は役人が賄賂を取つて贅沢するのに比べれば何でもない話である。

この個所から荷風讃りの文明批評を読み取る見解もある。しかしこのような記述もやはり重吉の〈小説〉の内容に基づいていることは見逃せない。というのは、「立身栄達」を「のらくら」生活することと同一視する理屈からは、あくまでも「侮辱」を乗り越え現状に満足したい重吉の、自分の立場の正当化という裏の狙いが読み取れるからである。

このように己の過去を操っている重吉は、果たして〈小説〉を書くことによって何を達成したのか。彼が今なお折々その〈小説〉を読み返していることの意義はどこにあるのか。次節では重吉の現状と〈小説〉の関係について考察を進める。

二・二　〈小説〉がもたらす現状の正当化

重吉は己の置かれている現在の状況を見つめるときに、その堕落の原点として種子との過去を意識していると言える。彼が〈小説〉を書くことで、自分の堕落の道程を論理的に整理しようとしたものの、本作の冒頭近くの記述を見ると、今なおその経緯を「不思議な心持」になって振り返るのみであり、それは成果を上げていないと言っても過言ではない。同じ個所で、彼が未だに「慚愧と絶望の念」を持ち合わせている記述も参照すれば、「男の持つてゐる廉恥の心を根こそぎ取り捨ててしまわなければならない」という目論見がどこまで成功したのかも疑わしく思われる。だが重吉の制作の試みを一概に失敗したものと捉えるならば、彼が〈小説〉を未だ大切に保管し、読返す理由はなくなる。

ここで再度、重吉に〈小説〉を書かせた原動力に注目したい。重吉は女から受ける侮辱に堪えられることを目指していた。そこで、たとえ自分の過去の経歴を合理的に整理できなかったとしても、最終的な目標であった侮辱の処理は達成されていると言えるのではないか。例えば、種子と死に別れ、お千代との生活も行き詰った時の重吉については以下のような説明がなされている。

重吉は女の欲心を得るためにはどんな屈辱を忍び得られる男である事を自覚してゐた。贅沢な玉突場の女主人に取入つて、七、八年の間淫蕩な生活をつゞけてゐる中、重吉は女から受ける屈辱に対して、反動的な快楽をも感じるやうになつた。

つまり重吉は、学生の時分に比して、女から受ける屈辱に堪え得る、いまの自身の性質を意識している。この「自覚」は重吉の種子と過ごした数年間の「経験」とペアとなって表現されることに注目すべきである。また、お千代の売春が二人の間で開示され、重吉が公然とお千代のヒモとなった夜の彼の内面は以下のように描写される。

重吉は曾て我儘で身の修まらない年上の女と同棲した時の経験もあるので、下手に出て女をあやなすことには馴れてゐる。世間一般の男の忍び得られない事をしてみるのが、今では改められない性癖のやうになつてゐる。重吉には名誉と品格ある人々の生活がわけもなく窮屈に、また何となく偽善らしく思われるのに反して、懶惰卑猥な生活が却て修飾なき人生の幸福であるやうにも考へられてゐる。

「名誉と品格ある人々の生活」と「懶惰卑猥」な「性癖」と、その性質を異にしているものが、あたかも対立関係にあるかのように位置づけられている点は、「立身栄達」を自らの女性関係と都合よく対峙させる〈小説〉中の〈重吉〉の理屈と同じではないだろうか。しかも重吉のこうした考え方の背景には、はっきりと「年上の女と同棲した時の経験」が置かれている。重吉が〈小説〉を再々読み返すことを通して自分と種子の経歴を振り返っている点に鑑みれば、右に示した論理の仕組みと〈小説〉を繰り返し読み続けていることとの関係性が浮上してくる。常にその堕落の過程を〈小説〉の再読を通して回顧する重吉が、自身の過去を合理的に整理する手段を獲得し得たかどうかは疑わしい。ただし

重吉は、〈小説〉を読み返すことでもたらされる「自覚」や「経験」によって自分の現在の立場を正当化し、その境遇にこそ人生の幸福があるのだという認識までも獲得している。これは重吉が未だに〈小説〉を読み返すことの最大の理由ではないかと考えられる。

一方で、先に引用したように、重吉は既に女から受ける侮辱に「反動的な快楽」を見出すようになっている点も注目すべきである。『ひかげの花』では、重吉の内面がこのように変容するまでの詳細な過程は描かれていない。だが重吉のこうした性質は、お千代との同棲においてどのように展開していくのか、その動きをテクストに即して追うことができる。お千代の売春が公然となった夜の場面では、重吉について次のような叙述がなされている。

お千代と同棲してから、四、五年を過ぎてその生活はいつか単調に陥りかけてゐたのが、その夜から俄かに異様な活気を浴びて来た。それは自分と同棲してゐる女が折々他の男にも接触するといふ事実を空想すると、重吉は其事から種々なる妄想を誘起せられ、烈しく情欲を刺戟せられるがためである。

また重吉がお千代の囲われている杉村の妾宅に出入りするようになった時にも同様に、彼の性癖が表面化してくる。このような状況の展開は、まさに種子が重吉に秘密を告白した場面と同じものである。つまり、第八章で描かれている夜の場面、あるいは杉村の妾宅に出入りする場面では、重吉が自らのヒモとしての姿に直面させられていると言える。にもかかわらず、既に種子との同棲から「自覚」や「経験」を獲得している重吉は、「侮辱」を感じて「廉恥の心」に悩まされるものではない。むしろ自らの置かれた立場から掻き立てられる妄想に「烈しく情欲を刺戟せられ」て、自分の生活に「異様な活気」を感じ取るのだ。そもそもお千代との生活において、重吉は種子の場合とは異なり、相手の秘密に一年も蓋をして沈黙するどころか、自ら進んでお千代に秘密を曝露させた結果、「二人の心と肉体とはいよ〳〵離れがたく密接するやうに」なる展開にもやはり〈小説〉の影響が見られる。

確かに重吉はお千代との生活において経済的な支援を受け、日々の生活を送る手段を確保している。ただし厳密に言えば、重吉がお千代の〈稼ぎ〉を意識する場面は第一章にしか描かれていない。一方、お千代の売春が公然となった夜の場面、あるいはお千代が杉村の妾になった時等、もともと経済難を乗り越えるための工夫だったはずのヒモたる自己像に直面させられても、重吉は殆ど金銭的な関心を示さず、単に性的欲求の満足を考えているように描写されている。このため、お千代の〈ヒモ〉となることは、重吉にその変態的な性欲を満足させる手段さえも与えていると考えられるのである。

見落としてはならないのは、この両方の一致を可能にしているものこそ、彼の手になる〈小説〉だということである。重吉が「侮辱」から「快楽」を受け取るようになったことは、彼の創作の試みがもたらした結果であるのだ。彼は〈小説〉を読むことから得られる認識によって、自らの現状に満足するばかりでなく、

むしろそこにこそ「人生の幸福」があるのだとさえ考えている。常に自らの立場を正当化している重吉は、お千代の売春（ひいては自身のヒモとしての立場）に直面した時、以前のように「廉恥の心」に悩まされ「良心を麻痺させる」ために屁理屈を練るようなことはせず、ただ己の性欲を追求するばかりである。同様に、お千代と杉村の様子を想像する際も、「なさけないとも、口惜しいとも、また浅間しいとも思わ」ず、むしろ自分の「情欲」と「刺戟」とだけに集中できるのである。

三、おたみの〈手紙〉と『ひかげの花』の人物造型

三・一　おたみの誤解、塚山の「理解」

『ひかげの花』は、主に重吉とお千代とに焦点が置かれる小説であるが、末尾の第十三章においてそれまでに登場しなかった塚山という人が登場する。塚山の来歴が簡潔に述べられた後、彼とお千代の私生児であるおたみとの関係が、塚山を視点人物にして語られる。最後に、おたみが塚山宛に出した〈手紙〉が引用され、『ひかげの花』が閉じられるのである。一度流れを断ち切られた重吉とお千代の物語は、この〈手紙〉において、おたみの目を通じて再び語られて行くことになる。重吉が書いた〈小説〉と違って、おたみの〈手紙〉については、そのテクスト自体が小説の末尾に置かれているので、作品の構造上、特別な取り扱いだと言えよう。この〈手紙〉で書かれる内容を理解するために、当然その執筆の背景を考慮する必要がある。

ここで一先ず塚山とおたみの関わりを整理しておきたい。おたみは五歳のとき、女髪結の養女になるが、その店の客である塚山の妾に可愛がってもらい、彼女の世話で小学校に上がる。二、三年の後、女髪結がその夫と失踪した時、おたみは「塚山さんの妾宅に養はれてその娘のやうに」なる。関東大震災の日、当時十一歳のおたみは裁縫の稽古に行ったまま行方知らずとなる。それから四年が経過し、塚山の妾が丹毒で亡くなるに至っても、その消息は依然として不明であった。塚山は妾を亡くした翌年の春、偶然にも箱根の旅館で金貸しの老夫婦と一緒にいたおたみと出会う。この時塚山は、震災後おたみの世話を見ていた老夫婦に対して、現在彼女を引き取る人がいないことを告げ、「若干の金をも与へた上、此後も身の上の事については相談に与つてやらうと云つて別れ」る。おたみに出会ってから半年経った後、塚山は汽車で再びおたみと金貸しの老人とに出会う。妻を亡くした老人は「話相手におたみをつれて伊香保の温泉に行くのだ」と塚山に告げるが、塚山はおたみの体の早熟を見逃さない。以下その後の流れを引用する。

塚山は六十歳を超した金貸しと、十六七になつたおたみとの関係をいろ〳〵に想像して、其真相を捜りたいと思ひながら、其機会がなくて又半年ばかりを過ごした時、こん度は突然おたみの手紙に接した。おたみは某処のダンサーになつてゐた。そして遠慮なく塚山に金の無心を言つて寄越したのである。その後二年ばかり塚山はおたみの消息を知らなかつたが、偶

然毎夕新聞の記事からその拘留せられた事を知り辯護士を頼んで放免の手続きをしてやつたのである。

右の引用のうち、特に二つの事実に注目しておきたい。一つは、おたみがダンサーになった時に、塚山に手紙を送っていることである。ここではその手紙について、「金の無心」としか触れられていないため、この時の手紙がいつどのような況で書かれたのかが示されない。ただし、この手紙から二年後に出された二度目の〈手紙〉のなかには、この時のことを指すと思しき言葉が記されている。それは従来の『ひかげの花』研究でも問題視されてきた、おたみの「一番幸福であつた」時の思い出である。実際におたみは、その思い出について、「この前の手紙で申し上げましたやうに」と前置きしつつ改めて書くのであり、そのことからも、最初の手紙に同じ話が含まれていたことが理解される。

もう一点注目しておきたいのは、塚山がどのようにおたみが検挙されたことを知ったのか、その経緯である。既に、第十一章において、お千代も新聞の記事を目にしているが、その記事には「深沢とみ」という偽名が載せられているだけである。仮に塚山がおたみの本当の商売もその偽名も知らずにこれを読んでいたとすれば、「深沢とみ」が、二年も消息を絶っているおたみであるということを直ちに推察できることは殆ど不可能だったであろう。娼婦たちが検挙された旨を詳しく報じたのは毎夕新聞の記事のみであるし、そもそも「骨董の鑑賞と読書とに独善の生涯を送つてゐ」る塚山がその記事を私娼のお千代と同じく「一字一句も読みおとさないやうに」と、注意深く見る必要さえないからである。裏を返せば、塚山がおたみの職業等について既に知らされていない限り、新聞記事だけからおたみの検挙について知ることは極めて困難である。だとすれば、塚山はこの時点で既におたみの職歴などの事情について知っていたのではないかと推測できる。

このように考えると、単に「金の無心」と片付けられる一回目の手紙の内容も想定できる。金貸しの老人と関係を持たされたと思しきおたみは、逃げるも同様に上京するが、ここでも体を売るしか生活を送るすべがなかった。そこで彼女は唯一「相談に与つてやらう」と言ってくれた塚山に対し、己の行状を告白しながらも人生で一番幸福だった頃の思い出を訴え、援助を求めたのであろう。仮にこのように感傷的な思い出を書くのは、金目当てだったとしても、金の要求など全くない二通目の〈手紙〉でも同じことを繰り返す理由について考える余地が残されている。二回目の〈手紙〉において、おたみは「母とそれから其愛人との秘密を曝露」できる相手は「あなた様の外には誰」もいないと述べ、塚山に対する信頼感を表現している。〈手紙〉の末尾において「一番幸福だつた」時の話を「懐かし」く思っている塚山に打ち明けるところも、おたみの同じ内面の延長線上にある。しかしこのようなおたみの信頼は、あくまでも一方的なものでしかないという点が極めて重要である。塚山は最初の手紙を「金の無心」としてしか認識していないし、二度目の手紙に対しても、「小説のやう」だという言辞が示すように、一定の距離を置いている。また、彼

のおたみに対する思想的な立場も以下のように描かれる。

塚山は孤児に等しいおたみの身の上に対して同情はしてゐるが、然し進んで之を訓戒したり教導したりする心はなく、寧ろ冷静な興味を以て其の変化に富んだ生涯を傍観するだけである。塚山は其性情と、又その哲学観から、人生に対して極端な絶望を感じてゐるので、おたみが正しい職業について、或は貧苦に陥り、或は又成功して虚栄の念に齟齬するよりも、溝川を流れる芥のやうな、無知放埒な生活を送っている方が、却て其の人には幸福であるのかも知れない。道徳的干渉をなすよりも、唯些少の金銭を与へて折々の災難を救つてやるのが最もよく其人を理解した方法であると考へてゐたのである。

このような言葉がいかにも荷風ゆずりのものに思われる。しかしおたみの悲劇的な人生を、あくまで「溝川を流れる芥のやうな、無知放埒な生活」としか捉えていない塚山に、本当におたみに対する「理解」があるのか慎重に考え直す必要がある。こうした塚山の幸福観を見ると、重吉を思い合わせることができる。重吉の人生観は、自分の境遇の正当化という狙いのもとで形成され、自ずと「懶惰卑猥」な生活に「修飾なき人生の幸福」を見出すに至る。しかし塚山の場合、おたみの自分に対する気持ちを理解せずに彼女の人生を見下すばかりで、自分はというと、やはり「独善の生涯を送つてゐ」るにすぎない。このため、『ひかげの花』においてもっとも荷風に近しい存在として評価されてきた塚山を相対化することが可能となり、その一方的な態度を一人合点に過ぎないと見ることもできるのである。

三・二 〈手紙〉に見えるお千代像

塚山とおたみの関係を確認すると、『ひかげの花』の末尾にあるおたみの〈手紙〉が執筆される理由が、おたみ本人が言うものに他ならないことが判明する。すなわち、これは〈放逸してくれた後自分がどうなったか〉ということを塚山に伝えるべきおたみの「義務」感によるものである。確かに単純な分量の問題として、おたみの〈手紙〉の大部分はお千代と重吉についての記述から構成されている。しかし、これは総体としてはおたみ自身について語るための〈手紙〉であることを忘れてはならない。特にお千代について語る時にも、おたみはお千代と対照的である自己像を主張していると思われる。この点に触れる前に、まずそれまでのお千代の造形について見ておきたい。

おたみの〈手紙〉に至るまでの記述を見れば、三人称の語り手が描き出すお千代は、決して知的な女性ではないことが明らかであろう。しかし「考へる能力がない」など、厳しい言葉で描かれるお千代の姿は必ずしも確乎とした性質ではなく、容易に相対化できるものである。例えば、第八章の末尾において「極めて簡単に考へてゐるので来年はもう三十三という年齢さへ忘れたやうに、ただふわ〳〵と日を送ることが出来るのであつた」とお千代の無思慮が指摘されている一方、第一章の冒頭部ではまさに自分の年齢を気にしながら「かうして暮らして行けるのも永いことはな

い」と将来を案じるお千代の姿が描かれている。あるいは、おたみが検挙された旨を新聞記事で知った後のお千代の敏感な反応は、必ずしも「予め考へてから事に従うのはこの女には出来ない業なのである」という語り手の認識に一致しない。

既述した嶋田論はこのようなお千代の人物造形を同時代の私娼の言説と関連付ける。嶋田はまたおたみがお千代について述べるときに語り手と同調していることを見抜き、それは「当時の私娼の言説を私娼であるおたみが内面化しながら、私娼である母親との距離を語っていく」ものであるとも指摘する。このような二人の距離を見る前に、ここで敢えておたみとお千代の関係に見られる親近感に注目したい。第十一章において、新聞記事の内におたみと思しき娘の名前を発見した際のお千代は、娘が「自分と同じ日影の身だといふ事を考へると、慚愧の念よりも唯無暗に懐かしい心持」がする件がある。そこでは例によってお千代にそれ以上の言葉が与えられていない。ただしおたみ自身の言葉で綴られている手紙の中で、彼女が母と同様な反応を見せているのみならず、それこそ二人の近さにつながる要因だと持論も述べる。

ほんとうの母がわたくしと同じやうなことをしてゐる女だと知つた時、わたくしは悲しいと思ふよりも（中略）何だか親しみのあるやうな心持がしたのです（中略）母の方でもやはりさういふ心持がしてゐたやうです。お互いに恥かしいと思ふ心持が其場合遠慮なくわたくし達二人を引き寄せてくれたのです。

しかし、〈手紙〉ではこの相互的な親近感を生み出している二人の「心持」は限定されたものになっている。それは前述した、おたみの言葉遣いが醸し出すお千代との距離感によるものだと思われる。

母はわたくしに貸間の代を倹約するために母の家に同居したらばと云ひ（中略）貯金ができたら、将来はどこか家賃の安い処で連込茶屋でもはじめるつもりだと云ひます（中略）わたくしは今まで行末のことなんか一度も考へたことがありませんから、弐千円貯金があると言はれた時（中略）覚へず母の顔を見ました。（中略）わたくしがホールにゐた時分にも、やはりお金をためて貸家をたてたダンサアがゐました（中略）ダンサアで貸家をたてた人は、みんなの噂では少し低能で、男の言ふことは何でもＯＫで、そして道楽はお金をためるより外に何もない人だと言ふはなしでした。母もやはりさういふ種類の女ではないかと思はれます。（中略）かういふ人が一心になってお金をためると、おそろしいものです。

おたみが母との間に置く距離が例えば「低能」、あるいは「おそろしい」といった表現から読み取ることができる。ここでもっとも注目したいことは、おたみが自分と母をそれぞれ別「種類」の女だとしているところである。おたみは、「ダンサア」の噂をする「みんな」という集団ないし層の内に自分が属していると考えている。それに対し、お千代はその「ダンサア」と同じく「みんな」の範疇には含まれない存在として区別されている。

先述したように、おたみのこうした認識の背景には、やはり〈手紙〉の読者である塚山との関係がある。つまりここでおたみは母を自分と別「種類」の女として位置付けることにより、自分自身のことを語ろうとしている。確かにおたみが描くお千代の姿は、語り手が叙述する「考へる能力がない」女のイメージと共通する部分を持っている。しかしおたみは「低能」なお千代の側面を誇張することにより、母と対照的である自己像を浮かび上がらせようとしているから、これも相対的な描写にすぎないと云わざるを得ない。

三・三　「考へる能力がない」お千代の必然性

『ひかげの花』における「考へない」、「低能」なお千代の人物造形の意義はどこにあるのか。確かにこのようにして描かれるお千代の姿は、彼女と重吉との関係性を描く上で欠かせないという先行論の指摘[13]はうなずける。つまり〈考えないお千代〉は、常に〈考える重吉〉との関係において見るべきである。ただしここで重吉とお千代の間に見える調和は、個々の利害が一致するところにおいて形成されている、という点を指摘したい。見てきたように、重吉は〈小説〉を読み返すことによって得られる「自覚」や「経験」に基づいて、自らの境遇を正当化するとともに、生活の手段と性的興味の満足とが一致した境遇を確保している。では、お千代の場合はどうなのか。重吉によれば、お千代は自分と同棲を続ける理由が以下の通りである。

> お千代はどういふ心持で此の年月自分のやうな不甲斐ない男と一緒に暮らして来たのであらう。彼女自身も気のつかぬ中いつからと云ふ事もなく私娼の生活に馴らされて恥ずべき事をも恥と思はぬやうになつたものであらう。折々は反省して他の職業に転じようと思ふ事もあるに違いない（中略）それにつれて、女の身の何かにつけて心細い気のする時、いかに不甲斐なくとも、誰か一人亭主と定めた男を持ち、生活の伴侶にして置きたいと云ふ心持にもなるのであろう―まづこんな様に解釈するより外に其道がない。

果たしてお千代が重吉との同棲を続ける動機を重吉のこの解釈に基づいて説明できるのか。まずお千代は重吉の言う「恥」にそれほど悩まされる女ではない。のみならず、恥をそこまで意識しないお千代の性質は、「私娼の生活に馴らされ」ることによる〈変化〉ではなく、彼女は本来そうした性質を具えているのである。お千代は重吉と出会う以前から、「男には好かれてゐたといふ単純な自惚れを持つてゐる」女性であった。奉公先等でも、男たちに手を出されたりすると、「それをお千代は侮辱だとは思はず自分は男に好かれる何物かを持つてゐるがためだと考へて」いた。お千代は、自分の性的魅力について「接触する男の数が多くなるに従つて、だん〳〵はつきりと意識せられ内心ます〳〵得意を感じる」ような性質も持ち合わせてもいる。確かに彼女にも「羞恥の念」が全くないとは言えない。だがそれでさえ「夫のために働くのだ」というの認識により「薄らいで」行くばかりであ

る。また、お千代が自分を「生活の伴侶」に選んだことについても、重吉の勘違いが認められる。第八章の冒頭ではお千代が焦点化され、もし自分の売春が知られ、重吉と別れることになった場合でも、「お千代の身にはさして利害はない」とあるように、お千代が二人の関係を現金に思っている傾向が見て取れる。

お千代は重吉との暮らしを続ける理由がやはり重吉の場合と同じではないか。つまり重吉との同棲において、お千代も生活手段となるものを獲得していると同時に、自分の性的な「興味」も追求し得ているのである。お千代の金銭的な欲望は確かに無視できないが、彼女は娘のおたみがいうように、「一心になつて金をためる」ことだけに集中しているわけではない。杉村との関係において、お千代も「一種痛烈な快感」を感受しているのである。彼女は重吉との同棲において、「夫のため」という口実を掴んだことで、生活を送る手段はともかく、自分の性的興味を「だん〳〵はつきりと意識」し出し、更に己の「快感を追求」するだけの余裕も獲得している。「夫のため」という認識がいかにご都合主義的なものであるか、お千代が意識していないだけに、ここでは「考へる能力がない」というお千代の造型が重要なものになってくる。というのも、彼女は自らの売春をあくまでも重吉のためだと思っており、己の行為に対して責任感（ひいては煩悶）の欠片も見せていないからである。玉子と重吉の会話にもあるように、お千代は重吉が私娼の生活を「勧めてやらせた」という認識を持ち合わせている。確かに第五章では、重吉の「計画」が記されている。これに続く第六章では、お千代が焦点化され、二度にわたって小日向水道町に行ったことや、斡旋屋の老婆に見入られて売春を勧められた経緯が語られる。第七章では謄写版の仕事を見つけた重吉が再び焦点化され、「その後」自分の「計画」に何の効果も見えないので、直接お千代に「女給」となる相談を持ち掛ける。つまりお千代は、重吉の「計画」とは別のところで、自発的に売春に関わり、私娼になってしまったのである。このため、重吉が「勧めてやらせた」という認識は、己の行為を無視した解釈でしかないのである。要するに、「考へる能力がない」お千代は自身のいまの境遇は「夫のため」にそうなったものであると誤認している結果、彼女の境遇も正当化され、重吉との同棲も続けられるのである。

四　おわりに

『ひかげの花』の主題は本当に「重吉・千代子・たみを結び付ける（中略）修飾なき人生の幸福[14]」なのか。ここまで論じてきたように、重吉のいう「修飾なき人生の幸福」の背景には、彼の「自覚」や「経験」があり、それが重吉の書いた〈小説〉と直結している。確かに重吉は〈小説〉の執筆を通して、「侮辱」の処理という大きな目論見を達成した。しかしそのために己の「男妾」のような姿に一年間も目を瞑り、それを種子に指摘されると、今度は道徳上の呵責を打ち消そうと勝手な理屈を立て、文明批評めいたことを言い、自らの立場を正当化しようとする。お千代の

場合、彼女はそもそも「考へる能力がない」女であるから、その自堕落な人生を単に「夫のため」のものだと思い込み、自分の欲望に浸ってしまうばかりである。おたみは、自分のことを「溝川を流れる芥」のように「傍観」するだけの塚山との認識の齟齬を把握できぬまま、「一生涯で一番幸福であつた」時の思い出を感傷的に描いてみせるところこそ、逆におたみの不幸を表現するものであると言わざるを得ない。つまるところ、主要な登場人物たちが感受している幸福とは、虚構に過ぎないのである。

『ひかげの花』というタイトルも、いま述べたことを言い表していると考えられる。彼らは己の利益を確保し、人生の幸福をも掴んでいるかのように振る舞っているが、斯様な状況は、所詮はヒカゲに生えるハナのようなものに過ぎない。また、彼ら日陰者の生活を「傍観」し、「無知放埒な人生」にかえって「幸福」を見ようとする塚山の態度も、虚構の「幸福」に充足する彼らの状況への「理解」に基づくものではなく、彼の「独善」から形成されているに過ぎない。塚山のいわゆる「無知放埒な人生」の「幸福」という思想も、この小説においては相対的なものとして呈示されているのである。

一方、おたみとお千代の仲が「愛情の交流」[15]にまで発展したかどうかも疑わしい。お千代は十数年もの間、消息を知らなかった娘に巡り逢い、「懐かしい心持」はするものの、「もう一度ダンサアになるか。それとも（中略）女給さんになった方が安全ではないか」と、すぐに商売に関する話題を持ちかけるのである。おたみに自分の家に泊ることを勧めるのも「貸間の代を倹約するため」であるにすぎない。重吉とお千代の間にも、重吉からお千代に向けられる眼差しから彼がお千代の性的な魅力を意識していることは理解されても、それ以上の何か、すなわち彼とお千代との関係を特別なものにするであろう何らかの「愛情」を認めることはできない。

畢竟、これは「仲間同士」の利害関係に基づく生活に過ぎない。おたみとお千代の出会いは、長年逢わない母娘のそれというよりも、むしろ「おいそがしいの」という「挨拶のかわりに使う言葉」が象徴的に示し、またおたみ自身が認めているように「仲間同士」のそれである。この二人ばかりでなく、重吉も娼婦の「仲間」であると考えられる。重吉が電話の応対をするところ、家計を遣り繰りするところ、あるいは第十章で描かれる芳沢旅館の女中に報告を受けて取った後の行動。お千代が杉村の袖を引っ張った経緯を「滑稽な事」として語った時にさえ、重吉は玉子と一緒に「笑ふ」だけであるし、その後さっそく杉村の妾となるお千代のために妾宅を探しさえもするのである。玉子が「理解と同情」というこうした重吉の働きぶりはまさに相互の仲間意識を現している。『ひかげの花』では主要人物たちの様々な欲望が満たされる生活の有様が描写されるが、その状況は各人物の主観的な自己肯定や己の利害にのみ集結する相互の関係によって成立するのである。

※本文の引用は、『荷風全集』（岩波書店、一九九二年五月～二〇一一年一一月）に拠った。

注

（1）宮城達郎「作品論『ひかげの花』」（「国文学解釈と鑑賞」第二五巻第七号、一九六〇年）。なお同上の資料で、中央公論の編集長が当局に呼び出され厳重注意を受けた等の経緯も述べられており、後の単行本の出版の遅れの背景も窺われる。

（2）菊池寛「下手な荷風」（「文藝放談」一九三四年十月）。これは『菊池寛全集』（文藝春秋、一九九三年一一月～二〇〇三年八月）には収録されていない。嶋田直哉氏がこの菊池寛の発言について詳しく説明している（「ヒモと金の物語―永井荷風『ひかげの花』を読む」、「昭和文学研究」第六一号、二〇一〇年）。本稿では、正宗白鳥「荷風とチェーホフ」（「改造」、一九三四年一一月）によって引用した。

（3）正宗白鳥「荷風とチェーホフ」（「改造」一九三四年一一月）

（4）川端康成「文芸時評評価と理解」（「東京日日新聞」一九三四年七月二十八日）

（5）加能作次郎「荷風氏の大作」（「東京朝日新聞」一九三四年八月一日）

（6）吉田精一『近代作家研究叢書「永井荷風」・吉田精一監修』（東京日本図書センター一九九二年。初刊→吉田精一『永井荷風』、八雲書店、一九四七年）

（7）小林一郎「荷風作『ひかげの花』論」（「文学論藻」第五十九号、一九八五年）

（8）笹淵友一『永井荷風―「堕落」の美学者―』（明治書院、一九七六年）

（9）坂垣公一「『ひかげの花』論―虚無的思想から幸福の原点へ―」（「名城商学」一九九七年一月）

（10）嶋田、前掲同論。

（11）第二章で玉子に自分の「事情や歴史」を語る場面、あるいは「（小説が）今もって大切に古鞄にしまってある。重吉はお千代が外へ泊って帰って来ない晩など、折々この旧作を取出しては読返してみるのである」という叙述等、様々な箇所からこの傾向を読み取ることができる。

（12）笹淵・坂垣両前掲論。

（13）坂垣前掲論。

（14）坂垣前掲論。

（15）笹淵前掲論。

（アブラル・バスィル　本学大学院博士後期課程）